

子供の将来観

長崎大学 教育学部 小畑 一

1. はじめに

私はスリヨダヤ学校でボランティア教師をしている。多くの子ども達に触れることができ、とても幸せに感じている。日本の子ども達と違う所もたくさんある。私も様々な考え方を持った子ども達と接することができ、とても勉強になっている。ネパールは、カースト制度により、子どもが自分の生きたいように生きられない国でもある。もって生まれたカーストにより就ける仕事も制限され、家庭の経済的貧しさはそういった原因から世襲されやすい。そういった家庭の子どもは、早くから自分の将来を悲観しやすいのも事実である。それが、子どもの学習に与える影響は計りしれない。そのことから、子どもの持つ将来観も大きく違ってくると感じる。そう考えた私は、学校での授業の合間に子どもの将来観を調べる為にアンケートを実施した。子どもの将来観を知ることにより、この国の子どもを少しでも理解してあげたいと思いつつ、日本語の授業に少しでも役立てようと考えた。アンケートの結果を考察しながら、この国の子どもがおかれている状況を述べていきたい。

2. アンケート結果

アンケートは、6 - 8年生クラスの日本語の授業を受けている子どもを中心に55人に対して行った。また、アンケートでは子ども達のカーストは聞かないことにした。カースト制度は制度上、1963年に撤廃されている。未だ、社会通念として根付いているが、子ども達に意識させることがないように心がけた。また、学校の先生と話し合った結果でもある。私は研究者ではない、あくまでも教師として接した。教師ならカーストを知ることにより、個々に応じた教育を行うべきかもしれないが、そんな力量は教師としても人間としてもない。それならば、あくまでも私に対処できる範囲で、アンケートを実施した。なお、アンケートは55名に対して行ったが、二つまで複数回答を認めた。

・アンケート結果

<男子> 25人

1	医者	7人	7	科学者	2人
2	スポーツ選手	5人	10	作家	1人
3	エンジニア	4人			
4	お金持ち	3人			
4	飛行士	3人			
4	兵士	3人			
7	先生	2人			
7	政府高官	2人			

アンケートの結果を見ると、医者が最も多かった。また、書かれていた多くの仕事は高い能力とエリート校への進学を要するものばかりである。アンケートを実施したのは、日本の子どもでいうと中学生にあたる子ども達である。それぞれの子ども達が、自分の将来に対して明確なビジョンを持ち始めてもいい時期である。幼い小学生が描く漠然とした夢では無いはずである。ある程度、子どもの持つ将来のビジョンとして考えてよいであろう。そう考えると、この学校の子供達はとても進学意識が強いと考えられる。多くの仕事は、大学への進学と専門的な教育を必要とするものであるからである。私がボランティアをしている学校は私立学校である。毎年、多くの子ども達が SLC を合格している。名門校の一つと言っていいだろう。ここ数年カトマンズにおいては、多くの親が子どもを私立校に通わせている。特に、中産階級として力を伸ばしてきているネットワークに顕著である。私が訪れた有名私立校では一クラス30人中25人がネットワークの子供でもあった。よい教育 = よい仕事と考えているからである。その為に受験競争がとても激しい。私の学校にも、まだ3歳ぐらい子どもが通って勉強している。教育方法や教育システムは未発達であっても、受験競争は日本と変わらない状況である。

しかし、他の学校の生徒が同じような夢を持つかということそうでは無いと感じる。ネパールにおいては、公立校よりも私立校の教育の方が良いと考えられている。公立校の SLC 合格者は私立校よりもはるかに少ないのである。また、公立校には家庭が経済的に貧しい子ども達が通っている。家庭が経済的に貧しいということは、コストが低いという事がよくある。その為に、公立校の生徒の中には早くから将来を悲観している子どもが多い傾向がある。地方に行けば、その格差はもっと歴然としているだろう。

また、教育にお金をかけようとしない親は教育に関して無関心であることが多い。そのことは、子ども自信の学習への無関心に繋がっていく。出席率の低さや中途退学率の高さは、それらのことが関係しているのである。出席率の低さや退学率の高さは、教育の効果である、子どもが自分の将来に対して明確なビジョンを持たない事に他ならないと考える。

私が行ったアンケートでは、ネパール全ての子ども達の傾向をつかむことはできない。公立校と私立校、教育に熱心な親とそうでない親の格差があまりにも大きい為である。しかし、私立校に通う子ども達の将来のビジョンの傾向を把握するためには、よい資料になるのではないかと考える。

次に女子のアンケート結果を考察していく。

3. 女子生徒のアンケート結果

男子と同じ様に女子にもアンケートを実施した。ある程度、アンケート結果を予測してアンケートに臨んだのであるが、実際アンケートをしてみると、驚く結果が得られた。男子生徒よりもはっきりした形で、私立校に通う子どもの傾向が現れたのである。

・アンケート結果

<女子>

1	医師系	16人	4	科学者	2人
2	歌手	5人	7	先生	1人
3	弁護士	3人	7	デザイナー	1人
4	外国への移住	2人	7	幸せになる	1人
4	エンジニア	2人	7	その他	1人

アンケートの結果の通り、医者や看護婦になりたいという結果が大半を占めた。その中でも医者が多くを占めていた。次に多かったのが歌手であるが、これはネパールらしい結果でもある。歌と踊りをこよなく愛する心の表れでもある。アンケート前は、男子生徒の方がエリート意識が強いのではないかと考えていたが、実際にアンケートをすると女子生徒の方が進学意識が強かった。ネパールでは、女性蔑視が根強く、女性教育不要論が未だに残っている。多くの親は娘よりも息子を学校に優先的に通わせ、息子をお金はかかるが良い教育を受けられる私立校に通わせ、娘をなるべくお金のかからない公立校に通わせている。これは、娘は結婚したら夫の家に嫁ぐので教育は要らないと考えているからである。

しかし、アンケートでは、圧倒的に進学希望が目立った。これは恐らく、娘を私立校に通わせる親はかなり教育に熱心なのであろう。その為に、娘も学習に熱心であり、進学意識が強いのであろう。何故、医者かということ、人の命を救うという尊い仕事がしたいというのもあるであろうが、女性できる仕事に限られているこの国では医者が最も収入の高い仕事ということも関係していると考えられる。資格を取れる能力さえあれば、男女の区別なく仕事に就けることができる。弁護士もそうである。しかし、政府の役人となるとそうはいかない。政府の役人は、未だカースト間により大きく隔たりがあるし、女性の割合も極めて低い。アンケートでも、男子にはいたが、政府の役人と答えた女子生徒はいなかった。男よりも女の方が政治から遠ざけられているのがわかる。

また、外国に移住と書いた女子も二人いた。最初は子どもらしい夢だなあというぐらいの考えでいたが、よく考えるとそうでもない。カトマンズでは、インターネットが盛んである。毎日、外国とメールのやりとりをしている人も少なくない。多くの方は、インターネットにより、外国の文化や生活を目にしている。その中で、子どもは外国への興味と憧れを持ったのであろう。しかし、電気の通っていない地方の子どももそうかというところではない。電気が無いから、インターネットもできるはずが無いのである。当然、カトマンズの子どもと同じ様に外国の情報も手に入れることはできない。恐らく、親や先生から伝え聞くカトマンズに憧れることしかできないであろう。多くの外国の情報に触れることができるカトマンズとそうではない地方では、子どもの持つ将来のビジョンにも大きく違いが出てくるのである。また、これは推測であるが、子どもなりに、

ネパールは女性蔑視の社会通念があることに気づいているのかもしれない。中学生の頃は社会に対して敏感になり、分かり始める頃である。周りの環境が大きく影響を与えてもおかしくないと考える。女性蔑視の考えがある事により、女性蔑視の無い外国に移りたいと思ったのかもしれない。子どもの感受性は大人が想像するより、ずっと敏感であるからである。

女子に対するアンケートからも、カトマンズの受験競争の厳しさが分かると思う。男子生徒に対するアンケート同様、全ての女子生徒の傾向を把握することはできないが、私立校に通う女子生徒の傾向は少しながら把握できると考える。女性蔑視の社会通念により、女性が社会に出て働くことは男性よりもはるかに難しいであろう。こういった社会通念により、多くの女性が将来のビジョンを非常に限定的にされているのである。持ち得るビジョンも叶えるのが非常に難しいのが現実である。

4. 最後に

先に女性でも能力があれば医者になれると書いたが、現実はずっと厳しいのが現実である。もし、不可触民と言われるカーストの子どもが能力があるからと言って、医者になれるだろうか。もし、医者になったとしても患者が来ないと考える。もし能力があったとしても、本当に満足のいく教育を与えてあげられるだろうか。もし子どもがこの厳しい現実を克服する力を持っていても、社会はそれを許すだろうか。現実には、このカーストの人々は、子どもと一緒にゴミ捨て場でまだ使えるものはないかと使いそうなゴミを探しているのが現実である。もし子ども達が自分自身の判断で他の人がしたがらない仕事を選ぶなら、その事は全然かまわない。しかし、社会がそれを故意的でなくても、強制するようなことがあってはならない。社会も教育も子どもの夢を大きく包んであげなければならない。

今回のアンケートでは、私立校の生徒という限られた範囲でしか調べられなかったが、子どもが受ける教育により大きく違った将来観を持つということは、はっきり分かったと思う。教育は子どもに生きる力と夢を与える。しかし、子どもが巣立っていく社会がそれを奪うものであってはならない。ネパールが子ども達の夢を大きく包んであげられる国になることを、力不足ながら望む。また、私がこのネパールにいる期間で子どもに伝えてあげられることを全力で伝えていきたい。